
アリたちの小さな戦い

雷雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリたちの小さな戦い

【Nコード】

N8749M

【作者名】

雷雲

【あらすじ】

俺は名もなきアリ。

俺は兵隊アリが憧れであり、夢だった。

だが兵隊アリとして生きるということはそんなに甘くはなかった。

（前書き）

初短編小説。

俺は今日も食糧を運び続ける。老いぼれのあいつたちと一緒に。今日もさんと日光が照りつける。巢の中のやつはいいなあ。やつと巢の近く。今日の仕事はこれで終わりだ。後は食って寝るだけだ。

俺は名もなきアリ。他の奴らもみんなそう。

俺達は名前の代わりに番号で呼ばれている。俺の番号は、914。俺はずっと昔から働きアリだった。だが、今日は違った。

「おい、914、大臣様がお呼びだ。」

俺は、巢の最深部に向かった。巢の最深部には、子供たちがたくさんいて遊んでいる。

真ん中の部屋に大臣はいた。女王よりも偉いような素振りを見せやがって。女王のほうがもっと偉いのに。

「さて、お前には新しい仕事を与えてやる。兵士になってほしい。こいつに言われるのは気に食わなかったんだが嬉しかった。」

「これが武器だ。」

武器は木でできた剣だった。下級兵士の装備だ。

「69号室に行け。552が待っている。」

「…はい。」

こうして、俺は働きアリから兵隊アリになった。

69号室に俺は向かった。

俺は兵隊アリが憧れであり、夢だった。

俺は、兵隊アリがすべて強く、かっこよくなれると思っていた。

だが、兵隊アリとして生きるということはそんなに甘くはなかった。

「よく来たな！！914！！君はこれから兵隊アリとして働いてもらう！！」

「はい。」

「声が小さい！！」

「はい！」

「もっと！！」

「はい！！」

「よし。」

「……………」

「まずは訓練を始める！！全体配置につけーい！！」
俺以外のアリが全員一直線に並んだ。俺はあわてて列の左端に行った。

「まずは腕立て伏せ100回！！始め！！」

俺は働きアリの時自然に体が鍛えられていたため難なくできた。
他のアリはかなりきついようだった。

「次はスクワット100回」

こうして、腕立て伏せ、スクワット、上体起こし（腹筋を鍛えるアレ）が終わった。

「よし、次は」

その時、一匹のアリが走ってきた。

「552！蜘蛛です！蜘蛛が現れました！！」

「何！！何匹だ！！」

「3匹です！！しかもかなりでかい！！」

「おい！！お前ら！！いくぞ！！」

だがアリたちは怯えて動かなかった。

俺は怒った。俺の憧れていた兵隊アリがこんなものだったなんて。そして俺は言った。

「なんでみんな怯えてんだよ！！戦うのがこわいのかよ！！」

すると、一匹の兵隊アリが言った。

「仕方ないじゃないか！！またたくさんのアリが死ぬんだから！！」
「う……………」

それは俺にだってわかっていた。そして俺は言った。

「なら、俺一人で言ってるやろ！！」

無謀だとわかっていた。でもこのまま隠れていることも嫌だった。

そして俺は、巣の外へ出た。

巣の外には自分の体の十倍ほどある蜘蛛が3匹いた。

蜘蛛の体は黒く、眼は赤く光っていた。

……………そして蜘蛛達が気付いた。

蜘蛛達は雄たけびをあげ俺のところに走ってきた。

俺は右に走って、木の剣で蜘蛛の横腹を刺した。

蜘蛛は呻き声を上げ、刺した所からは緑色の血が出た。

だが蜘蛛は怯まず、俺に体当たりした。俺は吹き飛ばされた。そして石に当たった。頭から血が出てきた。

目と目の間を血が流れる。

その時、あの兵隊アリたちが巣の穴から出てきた。武器を持って。

そして蜘蛛の所へ向かった。

俺の所に、あの一匹の兵隊アリが来た。そして言った。

「また大勢のアリが死ぬのは嫌だけど、仲間を見殺しにするなんかもっと嫌だからね。」

そういうと、蜘蛛の所へ行った。

「おれも負けちゃいけない！！」

そして、アリと蜘蛛の小さな戦いが始まった。

仲間たちが死んでいく。

最後の蜘蛛が死んだ。俺たちは勝った。

多くのアリは雄たけびを上げ、仲間と共に喜んでいる。

俺はあの兵隊アリを探した。

そして見つけた。血を流しているあの兵隊アリを。

「おい！！大丈夫か！！」

「あ、ああ…あの914って奴か…おまえは大丈夫だったらしいな…俺はこの通り、死亡寸前だ。」

そして小さく笑った。

「おれのやったことは間違いではなかったようだな……914。俺はお前に助けられた。おびえていた俺を助けてくれた。」

「……………」

「ありがとう……………」

そして死んでしまった。

俺は泣いた。

巢に戻った後、戦いに勝ったことでパーティーが開かれた。だが、俺はそんな気分ではなかった。

俺はあいつを墓に埋めた。石を置き、石に「901の墓」と書いた。あいつが901と知ったのは、大臣に聞いたからだ。

ある日、俺は人間に踏みつぶされ、死んだ。俺は今、雲の上の世界にいる。

ここにあいつはいるだろうか……………

（後書き）

できれば、評価感想ください。大はしゃぎしますので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8749m/>

アリたちの小さな戦い

2010年10月10日04時39分発行